

幸せしあわになる権利けんり

和歌山県立新宮高等学校二年
岡野明音おかのあかね

「人権」とは、人が生まれながらにもっている権利である。私は学校で何回も学んできました。そして、人権は、人種や性別などに関係なく、どんな人でも幸せに生きるための権利でもあるのです。しかし、どうしても自分とないか少し違う特徴をもつ人がいると差別をしてしまう人は残念ながら存在します。

世の中には、様々な障がいをもつ人がいます。障がいをもつ人に対して、世間にはかわいそうであると感じる人がいます。何故、「かわいそうである」と思うのでしょうか？私はそう思う時点で、障がいを持つ人を自分よりも下に見ていると感じてしまいます。そう思うのが悪であるとは思いません。実は私も、自身が小学生の時に同じことを思っていました。しかし、あるときからその考えは百八十度変わったのです。

私が通っていた小学校には二人、知的障がいをもっている同級生がいました。その子たちは普段、特別学級で授業中に特別学級の子たちの担任の先生は、その男の子に「誰にだってできないことはある。それに、この子たちはこの子たちにしかできない、素晴らしい才能を持っているんだから。表面だけで人を判断するのは間違っていると思うよ」と言いました。私はそれを聞いてハッとしました。この男の子だけじゃなくて、私も、この子たちのことをイメージだけで判断していたのではないかと。そのあと、自分は酷いことを言ってしまったとその男の子は泣きながら謝っていました。

それから少しして、私はなんとなく気になってその子たちのいる特別学級の教室に行きました。すると、そこにはたくさん折った作品や、壁一面に飾られた何枚もの絵がありました。それも、ただの遊びで出来るようなレベルではありません。私たちの知らないところでこんなにも素敵な作品を創り出して驚きました。先生の言っていた、その子たちの「素晴らしい才能」のかたまりをそこで初めて気付かされました。それから、私のクラスメイトほとんどが休み時間にその作品を見に、教室に遊びに行くようになりました。不器用だった私は、折り紙で色々な動物や、楽しい物を創り出せることが面白くて、毎日折り方を教えてもらいました。

私たちが小学校を卒業する頃には、折り紙が得意なSく

をしていたため、「皆と一緒に授業できないなんて、かわいそうだ」……こんなことをずっと思っていました。周りには同じ教室で授業を受けていない二人のことをからかう子も何人かいました。その度に、その子たちは困ったような、悲しいような表情を見せていたのをよく覚えています。

そんなからかいも、高学年になっていくごとになくなっていきました。理解も増え、その子たちを含めたクラスのみんなでどんどん仲良くなりました。しかし、小学五年生になったある日、特別学級の子も含めたクラス全員での授業がありました。その授業ではペア活動があり、一人の男の子がその二人のうちの一人の子とペアになりました。でもなかなか上手くコミュニケーションをとることができずペア活動が進みませんでした。その男の子はいらした様子で「なんでこんなに進まないんだよ。障がいがあるからどうせ一人で何もできないんだろー」と叫んだのです。その瞬間、教室は一気に静まりかえりました。すると、す

んは漢字に興味を持ちたくさん時間を漢字の勉強に費やし、私たちのクラスだけでなく、学校中で「漢字博士」として親しまれていました。卒業した後、Sくんは私たちと同じ中学ではなく、支援学校に進学しました。もう一人、絵の得意なYくんは、中学校が同じだったのでまた三年間を共に過ごしました。年々絵を極めていて、自分でストーリーを考え絵巻物などを作っていたりもしました。ついには、中学三年生の秋に行われた文化祭では、Yくんの描いた絵を学校のあらゆる場所に貼り、地域の人に見てもらった「Yくん展」が開催されました。見に来た人は口をそろえて「すごい絵だった」「感動した」と言っていたのが印象的でした。そばで見えていた私たちは改めてこんなにすごいクラスメイトがいたんだと思いました。そこで私は、小学校のときにSくんとYくんのことを「かわいそう」だと思っていたことを思い出しました。今は全く思いません。私は、自分の考えを恥じました。

障がいをもっている、他の人と同じことをするのが難しいかもしれませんが、でも逆に、彼らは彼らにしかできないことがたくさんあるのです。小中学校でのこの経験を通して私は知らないこともたくさん知れて、人としても成長できたと思います。好きなことをがむしゃらにやり努力をすることに、障がいの有無は関係ありません。どうか、あ

の二人が今も自分の「素晴らしい才能」をのびのびと伸ばせていますように。私も負けずに才能を開花させられるように頑張ろうと思います。「人権」とは、どんな人でも幸せに生きることのできる権利。そして、社会はどんな「多様性」が認められるようになってきています。これから先の未来、障がいをもつ人もより平等に輝いていけることを強く、願っています。

障しょうがいつて何なんだろう加藤かとう 紗耶さや 音ね

北海道旭川東高等学校一年

「障がいつて何だろう。」

小学一年の時、私がテレビの特集番組を見ていて、ふと考えた疑問だ。

当時、私の身の回りには障がいを持つ人はいなかった。いや、正確にはいたかもしれないが、少なくとも身内には誰もいなかった。そんな環境の中にいた私にとって、テレビの中にいる人が、

「現在はバリアフリー化が進んでいる場所があり…。」

「もつと障がい者への理解と配慮が…。」と言っているにも、イマイチピンとはこなかった。大変そうだなと思うくらいである。

「障がい者の人を支えていくことが私たちのやるべきことのひとつですね。」

コメンテーターの人が最後にそう言った。その時、私は

「病気と障がいの違いはなんだろう。」

と考えた。障がいとは病気ではないのだろうか、障がいと

病気の違いは何だろうか。そもそも、

「障がいつて何だろう。」

この疑問が障がいに対しての初めての関わりだった。

小学四年生のとき、転校生が三人入ってきた。学校集会で紹介されたのは確かに三人のはずだったのだが、一組しかない私の学年の中では二人しか自己紹介をしていなかった。その時は聞き間違いかと思ひ、あまり気にせずに帰宅した。次の日、いつも通り一番乗りで学校に着いたと思つて教室に行けば隣の特別教室から声が聞こえてきた。私の母校は、一学年に二つ分の教室があり、廊下をはさまず、すぐ横にあるつくりになっている。私の学年はずっと一クラスだったため、横の教室は「特別教室」と称され、名前も知らない他学年の人が出入りをしていった。だが、この四年間、特別教室を利用して入る人が私より先に来ているのを見たことがなかった。その教室から声が聞こえてくるのが不思議に思った私はその教室を少し覗いて見た。教室の

中は机や黒板だけでなく、トランプやボールさらにはぬいぐるみといったものが大量に置かれていた。入るどころか覗くのも初めてだった私はとても驚いた。そこで会話をしていたのは特別学級の先生と学級では見かけなかった転校生の女の子だった。彼女は私を見ると大きな声で

「おはようございますー！」

と言ってきた。私はそんなに大声で言わなくてもいいのになど彼女と自分のズレを感じた。

彼女は決まった授業の時だけ、私たちがいる交流学級に来た。だけど彼女は発言をする時でないのに発言をしたり、立ち上がって交流をする時には教室を走り回り、それを注意しても次の日には同じことを繰り返したりと、席が近かった私は正直かなりイライラした。

その日もまた、走り回っていたため、いつもより強く注意した。彼女はびつくりしたのか、すぐに静かになった。その時、彼女の担当である先生に

「彼女は発達障がいを持っている子だから、優しくしてあげて。」

と言われた。私は初めてその子が障がい者であることを知った。と同時に、障がい者ってこういう人なんだなと勝手に思い込んだ。

次に彼女に会ったのは社会の歴史の授業だった。先生に

言われたとおり優しく接しようと心がけた。私は

「わからないところはない？」

と聞いた。勝手に彼女には難しいと思つていたからである。わからない。そう返答されると思つていたが予想は百八十度違つていた。彼女は私の質問に対して

「大丈夫です。藤原道長は一〇一六年に摂政になり、その後…。」

と話し始めた。その内容は小学生の教科書には載っていないようなものばかりだった。人物名はもちろん、地名や年号まで全て暗記していることに驚きが隠せなかった。

私は初め、障がい者とは誰かの助けをかりなければならぬと、勝手に自分や周囲の人と比べていた。だが、その考えはとても浅はかだと言えぬ。確かに、誰かの手をかりなければならぬのは間違っていないかもしれない。しかし、それは私たちも同じことである。と、同時に、世間では「障がい者」と彼女らのことを分類するが、私は個性の一つだと考える。私たちがそれぞれ違った趣味やら得意不得意といった個性をもつように、彼女は、人から言われたことを覚えるのが苦手、自分の好きなことを覚えるのは得意という個性をもっているのではないだろうか。もちろん障がいをもつ人にとってそれを「個性」とされるのは嫌かもしれない。だが、私にとってはその人しかもつていな

い魅力であり、他人を尊重することを大切にしようとする今の私をつくってくれた人の出会いも、その「個性」をもつ彼女のおかげである。

病気とは医学的治療法で治るものをさし、障がいとは治らないものと一般的には定義されているらしい。しかし、それは障がいを「治すもの」と見たときである。私にとつては個性の一つであるため、マイナスなものとは受けとれないが、だからといって全くの配慮をしないこともひっかかる。

「障がいって何だろう。」

この小さな疑問は私を成長させてくれたものだ。自分なりの答えはだしているが、もっと考えていきたい。

幸せの伝播しあわせのでんぱ

徳島県立徳島北高等学校二年
木川真綾きかわま綾

私の祖父は事故の後遺症で、耳が聞こえずらく、目も悪く視野も他の人よりも狭いという障害をもっています。普段は補聴器を付けて生活していて、外出したときは祖父一人で歩くと危ないので、祖父と手を繋いでゆつくりと歩いています。特に夜道や段差がある場所、人が多い場所はより祖父を気にしながら歩いています。

私が祖父と手を繋ぎ始めたのは小学四年生頃です。私の家族と祖父母で大型ショッピングモールに行ったときに、祖父が人とぶつかりそうになりました。そのとき私がとっさに祖父の手を握ったことがきっかけです。その出来事以来、私は毎回買い物と一緒に行くときは、祖父と手を繋ぐようにしています。しかし、一度だけ祖父の手を離してしまったことがあります。それは、いつものように私の家族と祖父母で大型ショッピングモールに行ったときのことです。私は祖父と手を繋いで通路を歩いていました。すると、すれ違う人々がジロジロと私たちの手元を見てきてクスク

いました。それから祖父の所へ戻り再び手を繋ぐと祖父は嬉しそうな顔で

「ありがとう。」

と言ってくれました。その出来事があってから私の心は変わり、どこへ行っても祖父の手を堂々と引けるようになりました。

また別の日、祖父母と妹と私で買い物に行ったときのことです。私がいっものように祖父と手を繋ごうとしたら、妹が既に祖父と手を繋いでいました。私が「次買い物行つたときじいちゃんと手繋いでよ。」と頼んだ訳でもないのにどうして手を突然繋ぎ始めたのか妹に聞いてみました。すると妹は、

「この前の姉ちゃんの勇気すごいなって思ったけん私も真似しよって思ってた。」

と言いました。私はとても嬉しくなりました。自分のしていた行動が他の人の行動の原動力になっていた事が初めて分かりました。私の行動が妹に伝播したように、他の人々にも伝播していったほしいです。そういった人が一人でも多くなれば、高齢者や障害者の人々が住みやすい世の中になるのではないかと思うのです。

私が高校二年生、妹が中学一年生になった今でも、出かけたときには私と妹が交代ごうたいで祖父の手を引いてい

ス笑ってきました。祖父の耳にその声は届いていないと思いますが、私にははっきり届いていました。私は「この年でじいちゃんと手を繋いで歩くんっておかしかな。恥かしい。」と思い、とっさに祖父の手を振りほどいてしまいました。すると、祖父はすれ違った人にぶつかってしまいました。それから少しの間、祖父と手を繋げないでいました。その後、家族と祖母と合流し、先程の出来事を話しました。すると母が

「じいちゃん、真綾と手繋いどるときめっちゃ安心そうな顔しとったよ。じいちゃんは真綾がおらんと困るんよ。笑ったりする人は高齢者や障害者のこと何も思っていない人なんよ。あんたほんなんでもいいんか?。」

と言いました。そのとき私ははっと気付きました。他人の態度を気にしただけで、私の大好きな祖父を自然と差別する差別者になってしまったということに。同時に「これからもずっとじいちゃんの安全と安心を守るぞ。」と心に誓

ます。あのときの出来事は、差別者になりかけていた自分に気付かせてくれた訓戒として、しっかりと今も心の中から消えることなく残っています。人を見た目で判断したり、決めつけて差別したりする人は社会にはたくさんいるかも知れませんが、でも、そういう人こそが自分の大切な家族や人だけでなく、自分までも不幸にしてしまうのではないのでしょうか。高齢者や障害者にはもちろん代わることはできません。でもその人の立場になって考えたりすることはできるはずです。少しでもいいのでその一歩を踏みだしてみてもいいです。

これからも二人で祖父を支えていきたいです。祖父の明るい未来のために。

弟と向き合って

酒井賢太郎

愛媛県立宇和島東高等学校一年

私は、パソコンにある一つの動画を見つけた。まだ「赤ちゃん」と呼ばれている三つ下の弟との動画だ。私は三兄弟の長男で、真ん中の弟が障害を持って生まれた。動画の中で私の心に刺さった言葉がある。

「しゃべれる弟が欲しい。」

まだ幼い私は、そんなことを言っていた。

弟の持つ障害は口ウ症候群という。男の子に発症しやすく、発症の割合は十万人に一人と聞いた。弟は、生まれた時から体が弱く、人よりも成長が遅い。周りの支えもあつて、今は、日常生活に特段不自由はなく、会話もできるようになった。

とはいえ、弟との生活で、私が困っていることが2つある。

一つ目は、泣くことだ。弟はみんなが笑っているのが苦手で、周囲の人の笑い声を聞くと、大泣きして周りの人達をビックリさせてしまう。笑い声だけでなく、些細なこと

スなどで体調を崩さないか」など、自分のことのように考えることがしょっちゅうある。

そんな不安を払しょくするため、私は積極的に弟の面倒を見ることにした。服やズボンの着替え方、箸の持ち方、あいさつの仕方。日に日に成長している弟を見て、嬉しい気持ちでいっぱいになる。

障害をもつ弟を前にして、「しゃべれる弟が欲しい」と言っていた自分が、兄として恥ずかしくてならない。当時の私は、障害のある弟、みんなとは違う弟を持つことを隠そうともしていた。「いじめられるかもしれない」「受け入れてくれないかもしれない」と、本当の弟を打ち明けられずにいたのだ。弟を心配し、大事に思っていたことに間違いはないが、「他のみんなとは違う」という思いにとらわれていた。

だが、保育園に入ってきた弟を見て、友達は周りのみんなと何も変わらず接してくれた。今でも鮮明に覚えている。私は、ホっとした。今思えば、障がい者に対する偏見や差別もある中で、他のみんなと変わらず接してくれる仲間がいて、とても救われた思いだ。

この十五年間、障がい者と共に生活し、障がい者という存在が当たり前になっている私ができることは、「他のみんなとなんら変わらない人だ」ということだ。私の弟は、

で怒ったり泣いたり、その後は疲れて寝たり、正直うんざりしていた時期もある。

二つ目は、入浴後に発作が起ることだ。昔から弟はお風呂が好きで、私もよく一緒に湯舟につかった。幼い頃は何事もなかったのだが、最近、お風呂から上がるとひどい発作が起るようになった。いつも寝込んでいたりパニックになり叫ぶので、私もどうしていいかわからない。発作が起ることに家族もだんだん慣れ始めているが、激しい発作になることもあり、何か大変なことになりはしないかと、すごく怖い。そして弟が大好きなお風呂の時間が次第に短くなっていくことに、私はとても不安を感じている。

弟は今、中学一年生で特別支援学校に通っている。小学校の時から同じ施設で勉強を含めた日常生活を送っているので、兄として、今の生活に不安はない。しかし将来、弟が社会に出ることを考えると、心配でならない。「しっかりと他者の言うことを聞けるのか」とか、「弟自身がストレスを軽減すること、私ほとても不安を感じている。」

ただみんなより背が低くて、ただ上手に話せない。それだけのことだ。私は弟を障がい者と思っていない。家族の一員であり、みんなの中の一人なのだ。

この世の中には、障害に対して偏見のある考え方や見方があふれている。多くの人にとって、障がい者が身近ではない。身近に存在しないから、これらの偏見が減らないのだとも思う。だから、あえて勇気を出して障害のことを打ち明けてみることも大事なかもしれない。考えてみればそれは、障害に限らず、日常生活の人間関係全てに言えることだと思う。どんなコンプレックスを抱いている人も、周りに迷惑をかけることがあっても、それが個性だと考えることが不安解消への小さな一歩になるかもしれないと思うことだ。

また、他者の個性を認めることは、自分の人生を豊かにすることにつながると思う。私は、弟を理解しているつもりでいた。だが、弟の将来を考えた時、改めて弟について知り、自分自身の行動を振り返って考え直すことで、私の中の偏見をなくすことができた。今、弟とともにとても充実した日々が送れていて楽しい、というのが本音だ。

弟には課題がもう一つある。腎臓の機能低下だ。腎臓には、血液中の老廃物を尿として排出させる役割があり、その機能がなくなると健康的な血液を身体中に運べなくな

り、最終的には死に至る。弟の腎臓は、必要な栄養も尿から排出してしまうらしい。弟の症状を聞いたとき、やはり死と関係づけてしまった。血液を健康に保つためには、弟は二日に一回、一日中病院のベッドの上で機械につながれ、血液を循環させなければならぬ。私はますます胸が締め付けられる思いになった。ただでさえ注射や病院を怖がり、検査を受けるのも一苦労な弟が、一日中ベッドの上にいるのは大変な苦痛ではないか、不安で仕方がない。しかし、弟が頑張るしかない。私たち家族も、寄り添うだけでも力になることができばと思う。

高校に入学してから、勉強に部活に忙しくなる中、幼いころの動画をきっかけに弟と向き合うことで、大切なことに気付いた。私は、覚悟を決めた。いつ、病院で付きつ切りの看病が必要な状態になるか分からない。けれどそんな弟と一緒に生活できる毎日を、一日一日を、大切にしたい。

サイクリングとの出会であいから

鳥取県立鳥取聾学校高等部一年

菱川玲

小学校六年生の時、サイクリング協会のサイクリングに初めて参加した時の気持ちを今も覚えている。野原を走り抜ける心地良さ、風の匂い、体から出る心地よい汗、メンバーとの語らい。サイクリングって楽しいなと思った。また、このサイクリングがこれまでの自分を変えてくれるかも知れないとも思った。

小学校に入学してからの僕は、人間嫌いで集団の中に入ることがとても苦痛だった。今思い出しても苦しくなる。人間嫌いになった理由として、二つの理由があったと思う。

僕は、生まれた時に聴覚障がいがあることが分かり、小学校一年生の時に、人工内耳装着の手術をした。人工内耳を装着して、確かに聴こえはよくなったが、聴こえがよくなることは、雑音の入りもよくなるということである。人の声がよく聴こえるようになってともうれしかったが、僕はその日から様々な雑音に苦しむようになった。特に小学校の大集団にいる時は、ワイワイ・ガヤガヤの声、椅子

「弱虫ペダル」は何をしても駄目な主人公が自転車に夢中になり、努力を重ねて強くなっていく物語である。僕は、主人公にあこがれの気持ちを抱き、自分もいつかは主人公のようになりたいと日頃から思っていたのである。

サイクリング協会のサイクリングをはじめてからおおよそ五年になるが、今も参加している。メンバーの年齢は、幅広く、中には六十歳代の方もおられる。毎回、二十人から三十人のメンバーが一行になり、三十キロ程度走るのだ。走る時に感じる風、見える景色、そして休憩時間の語らいなど全てが心地よく、サイクリングは僕の生活に欠かせないものになっている。サイクリングに出会えたから僕は立ち直ることができ、今の生活も充実している。

このサイクリングをわざわざインターネットで調べ、紹介してくれたのは母だった。母にどうしてサイクリング協会を勧めてくれたのか尋ねてみた。母の答えは、サイクリングという大好きな活動を通して、仲間づくりをして欲しかったということだった。本当に母に対しては感謝の気持ちでいっぱいである。

僕は、現在、鳥取聾学校高等部一年生である。倉吉から片道約二時間かけて通学している。僕は、陸上部と写真部に属し、生徒会活動にも熱心に取り組んでいる。小学校時代の僕を知っている人は、今の僕を見てきくと驚くだろう。

のガタガタ鳴る音は耐えられなかった。そのため自然に集団から離れるようになったと思う。

もう一つの理由は、周りの子どもたちが僕の頭に装着された人工内耳をじろじろ見て、「これ何。耳に変なのつけてる。」と騒ぎたてることだった。好きでつけているわけでもないのに、その度に不快な思いをした。

このような理由から、僕は小学校時代の大半を、人との関わりを避けて生活してきた。

六年生のある日のことである。母が僕に

「お母さんも参加するから、あなたもサイクリング協会のサイクリングに参加しない。」と言ってきた。急な話だったので、最初は驚いたが、そもそもサイクリングは好きだったので、参加してみようかという気持ちになった。

サイクリングは集団で走ったとしても、基本は一人で走る。他の人のことは気にならない。そして、何よりも当時の僕は漫画「弱虫ペダル」に夢中だったのだ。

僕は自分の体験を通して、人は何かのきっかけで変わることができると考える。その時に大切なことは、自分が好きなことと出会い始めようとする事、その時に支えてくれる場や人々が存在することである。

僕は鳥取聾学校高等部を卒業したら、仕事内容として、人々が喜んでくださるような職に就きたいと思う。それは、人に喜んでいただける仕事をする事が、自分自身が強く生きることにつながると思うからだ。

仕事、日常生活、趣味など自分が行うことを通して誰かの支えになれば、それはとても幸せなことだと考えている。